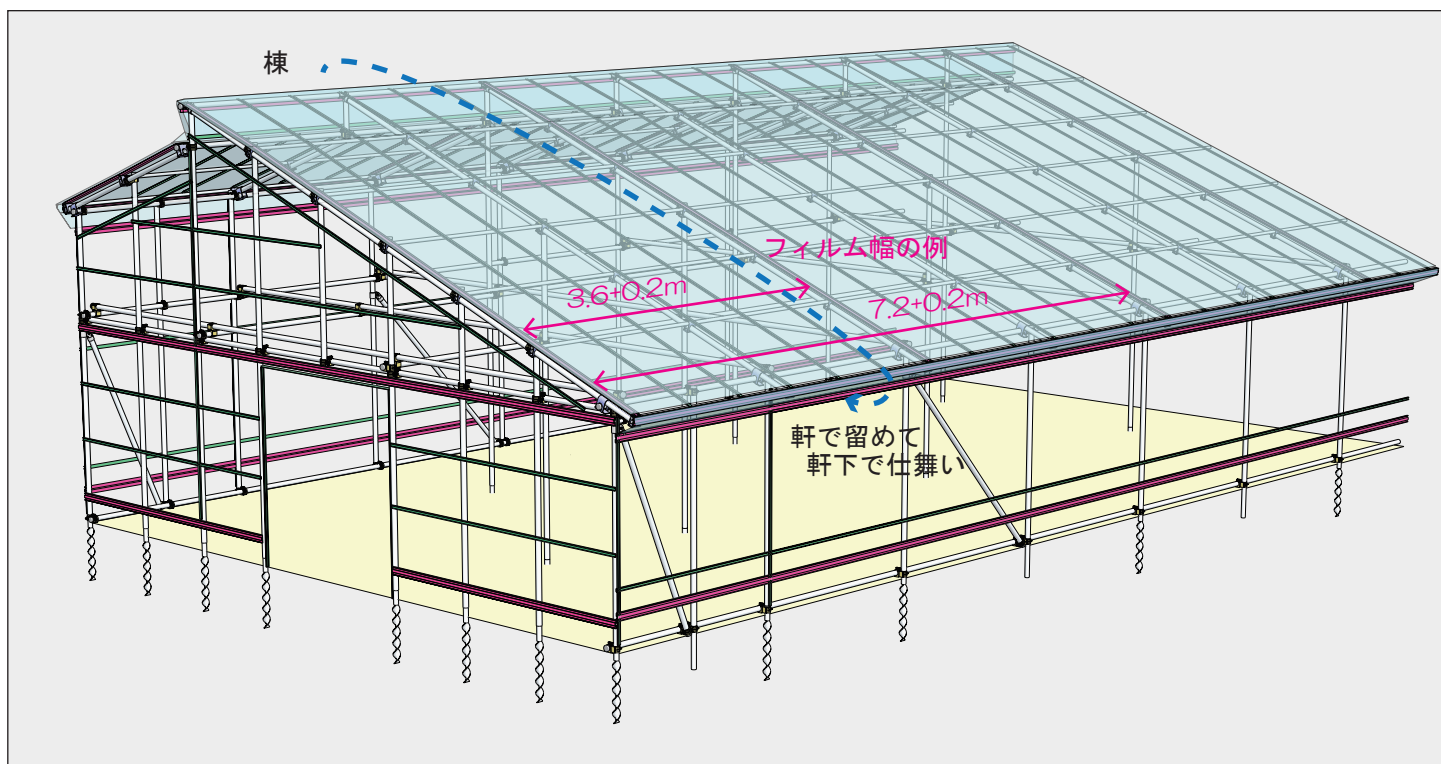


# 4. フィルム被覆と防虫網

## 4-1 屋根面



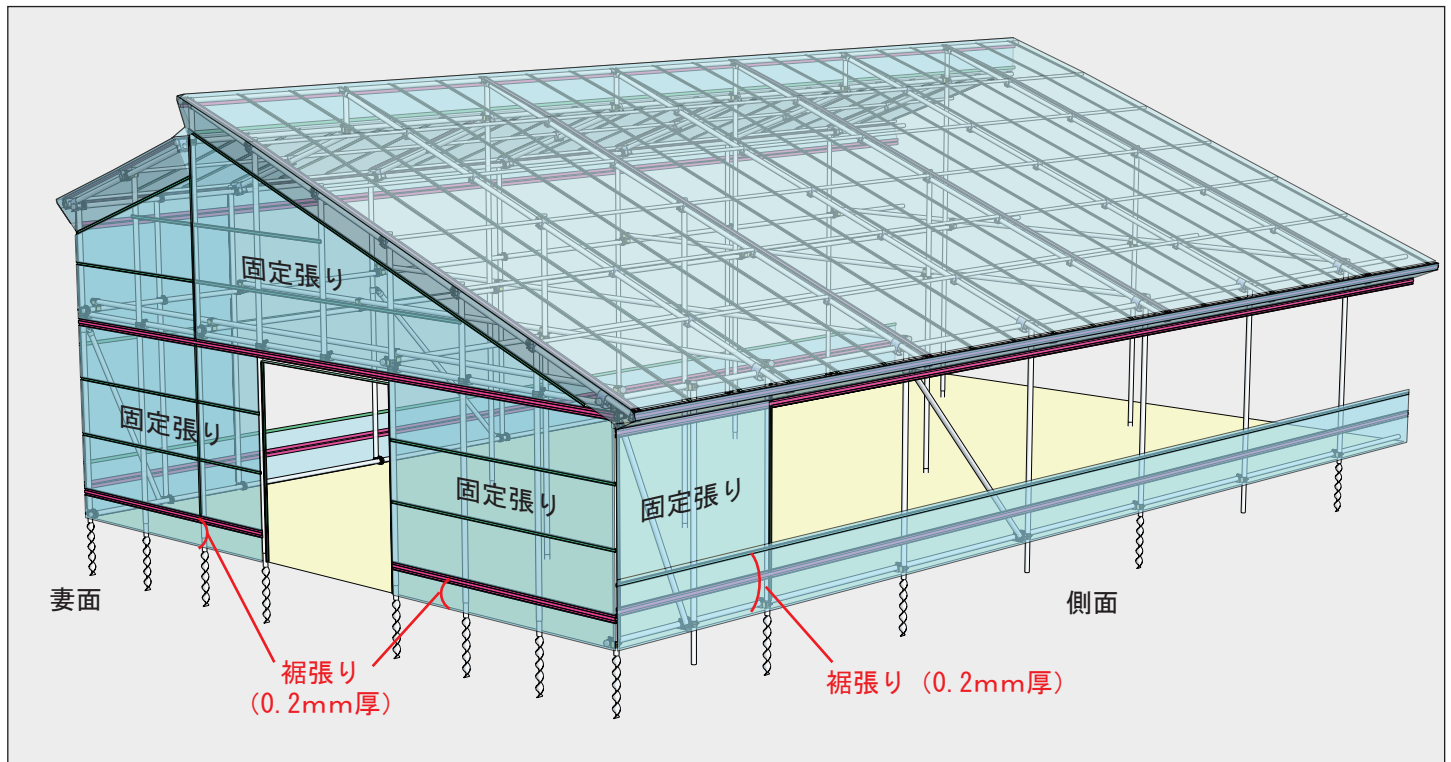
PO系フィルム（厚さ0.15mm）を使います。フィルム幅は、屋根のフィルム留材（ダブル）の間隔（3.6m）と留めしろ（両側10cmずつ）を考えて用意します。妻面側から、棟のフィルム留材にシワやたるみが出ないように注意しながら展張し、フィルム留材にスプリングで留めていきます。軒で一度で留め、さらに軒下の側窓のフィルム留材（ダブルの上方の溝）に留めます。

フィルムをしっかりと張るため、途中のフィルム留材（シングル1～2本）にもスプリング留めを入れてください。

- ◆金具のカドでフィルムを傷つけないよう気をつけてください。
- ◆フィルム留材で継ぎ合わせる場合には、雨水が侵入しないよう、上側のフィルムを表側に重ねて留めることが基本です。



## 4-2 固定張り



### ①裾（すそ）張り

裾張りには厚手（0.2mm）のPO系フィルムを使用します。妻面は、フィルム留材（ダブル：地面から約30cm上）に、側面はフィルム留材（シングル：地面から50～70cm上）にスプリング留めします。裾張りの下端は、ハウス外周の地面を掘って埋めるか、防草シートを敷いている場合には、その下に敷き込んでヘアピン杭で浮かないように固定します。



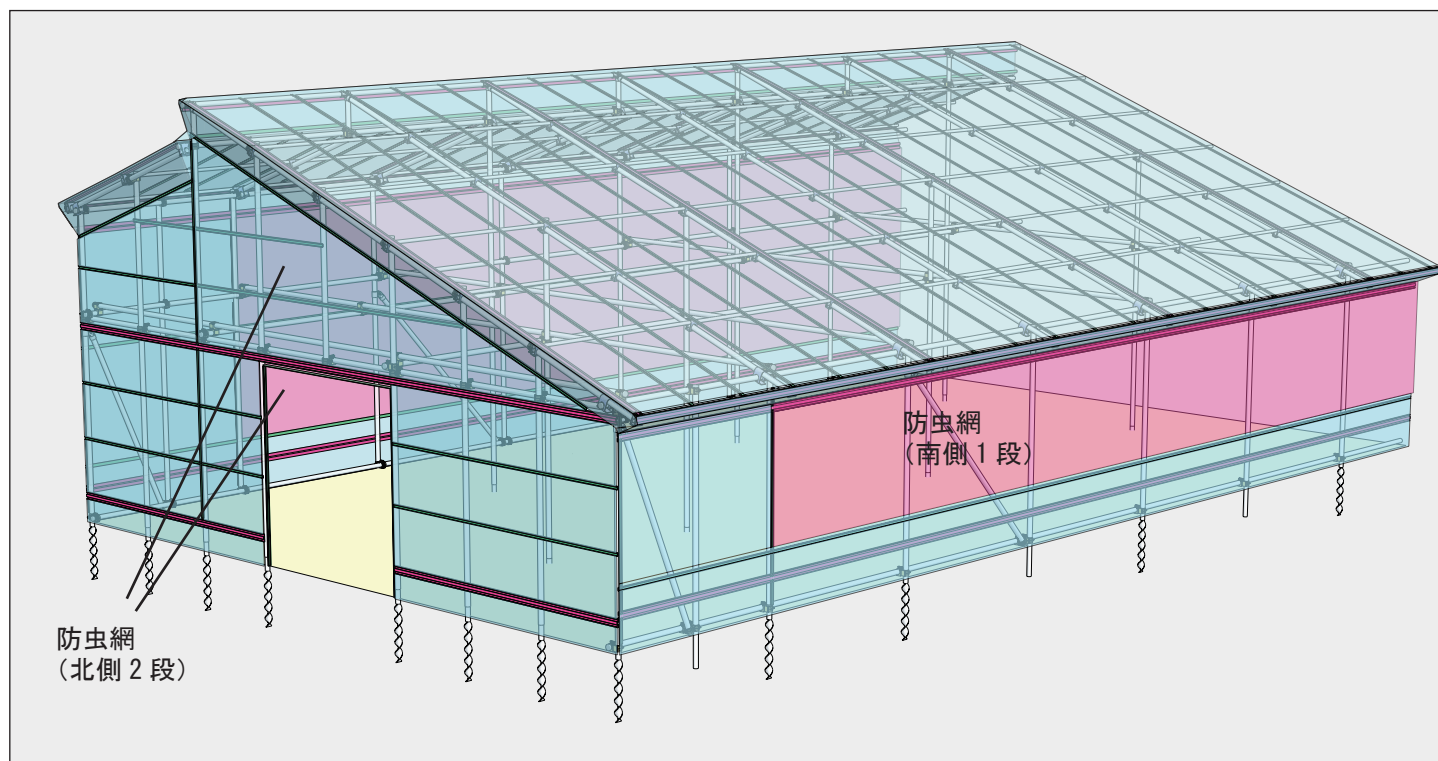
### ②四隅の固定張り

次に、四隅の固定張り部分のフィルムを張り、妻面および側窓開口部を除く箇所に固定張りを張ります。





## 4-3 防虫網と側窓

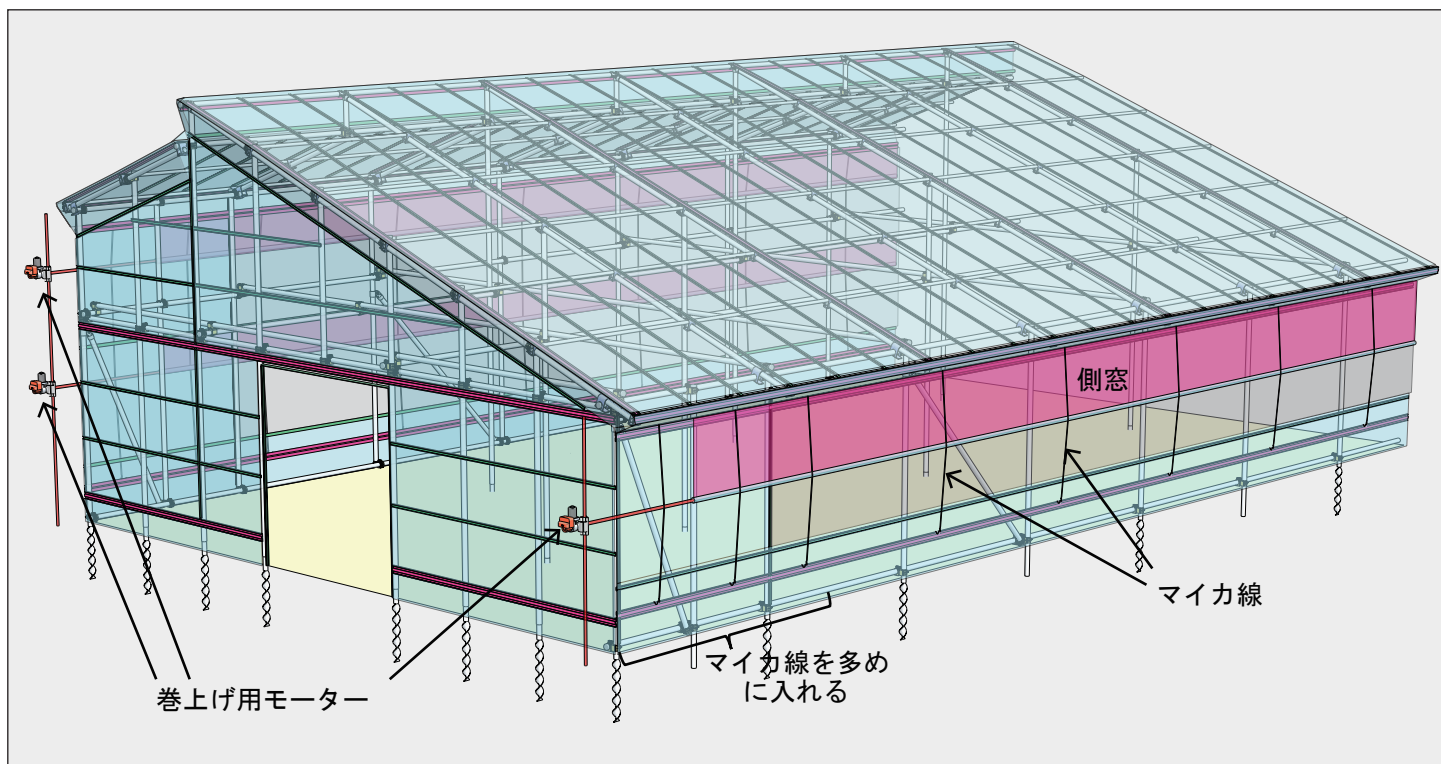


### ①防虫網の取付け

このハウスの例では、1.5m 幅の防虫網を使用し、南側 1 段、北側 2 段に取付けます。シワにならないようにスプリングで固定し、余分な網は側窓の巻上げ時に巻込まないように、端を5cm以内に切りそろえます。

防虫網は防風網としても使用される4mm 目合から、コナジラミ類の侵入を防ぐ0.4mm 目合まで多様な製品がありますが、目合の小さいものほど破れ易いので、展張時に穴をあけないように注意してください。





## ②側窓と巻上げ機の取付け

側窓用には、PO系フィルム（厚0.15mm）を使用します。フィルム幅は、巻上げ部分の高さプラス15cm以上の余裕をとって1.5～1.8m幅を用意します。巻上げフィルムをスプリング留めするとき、少しでも斜めになるとシワがついたり、巻上げ軸のパイプが水平にならない原因となりますので、真っ直ぐに留めます。

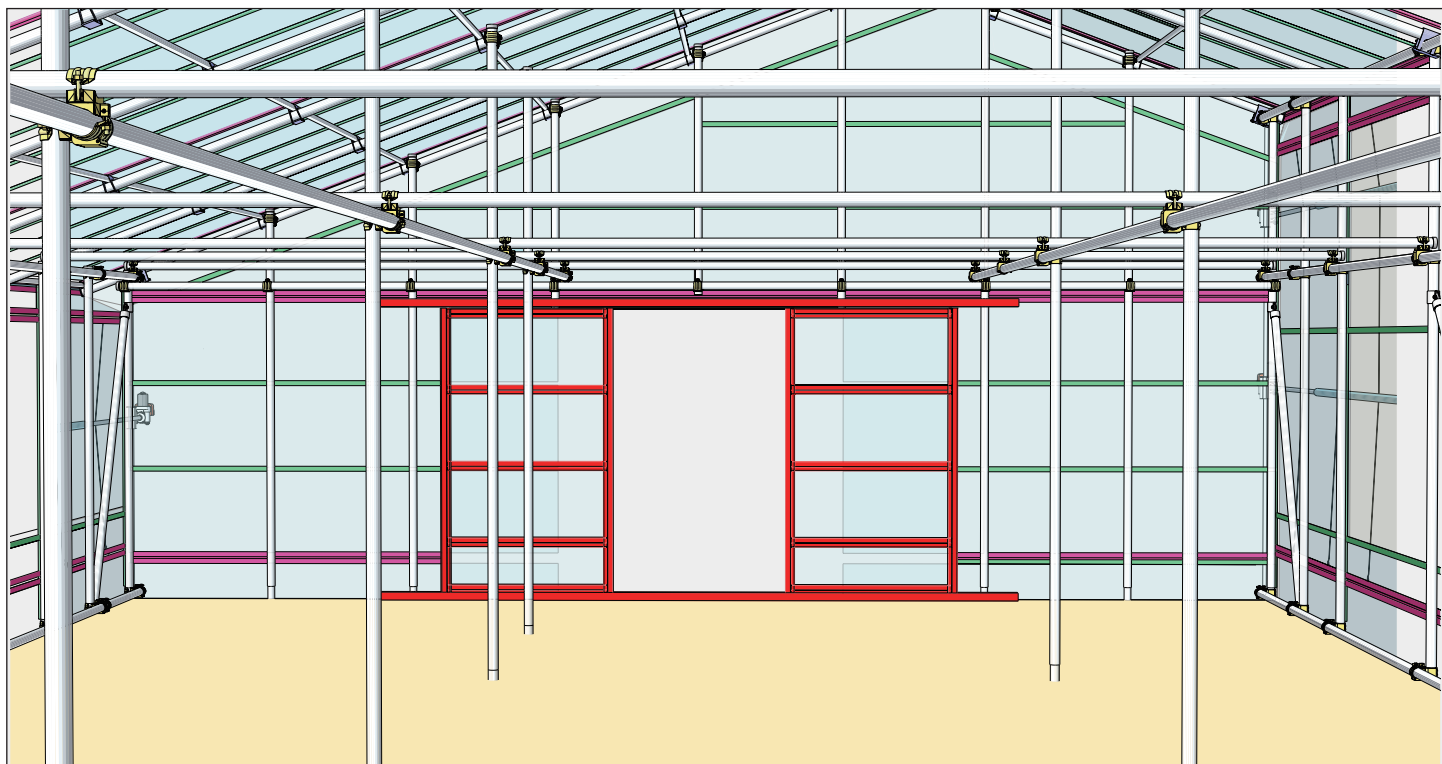
巻上げ機を支持するパイプを立て、手動巻上げ機または巻上げ用モーターを取付けます。また、バタつきを抑えるためのマイカ線をマイカ線留め金具で固定します（妻面に近い固定張り部分には多めに取付け、あとは約1.8m間隔にします）。

◆強風等で側窓の端がバタつき、フィルムが伸びたり切れたりする場合には、側窓端部外側に防虫（風）網（幅1m程度）を1枚補強（保護）するとバタつきが抑えられ、傷みが緩和されます。





## 4-4 ドア

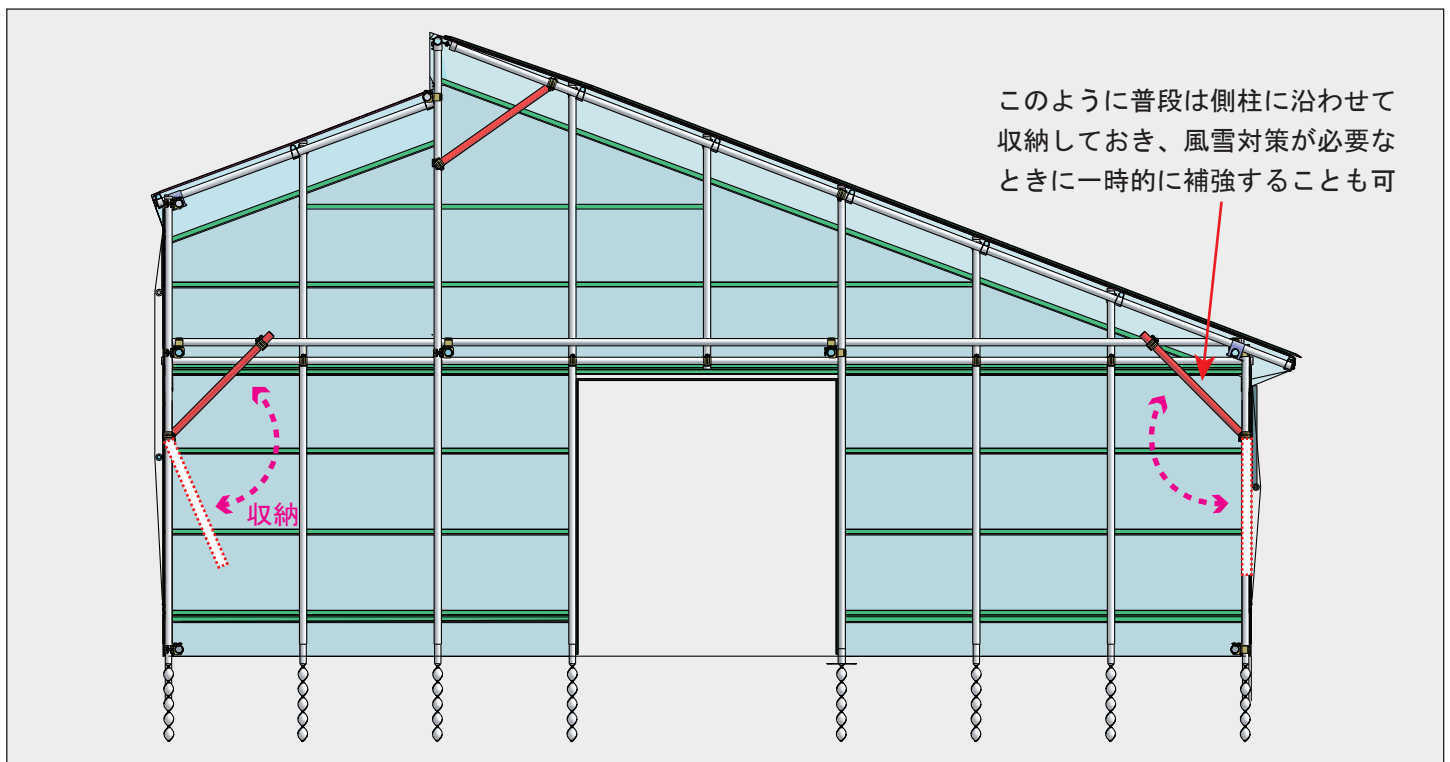


ドアは、市販のハウス用扉セットを組み込むのが簡単です。市販のハウス用扉セット（商品名：マルヒロドア、ピシャットドア、サトーのドア等）の規格は、幅 1.2m（両開き）、高さ 2.0m を選びます。なお、妻面の柱パイプに取り付けますので、購入の際、ドア上下のレール取付用金具（U 字ボルト）は  $\phi 48.6\text{mm}$  用を指定します。

- ◆ドア枠上部と妻面梁との間に隙間ができますので、寒冷地の隙間風対策には、フィルム留材を取付けた 50cm 角の C 型鋼（長さは扉の間口分）を隙間にはめ込み、フィルムを張ると良いでしょう。
- ◆足場用鋼管とクランプを利用した開き戸を作することも可能です。



# 5. 補強工



耐風性、耐雪性を向上させるための補強工（方杖）の一例として、方杖を3箇所施工する例（ $\phi 48.6\text{mm}$ パイプ自在クランプ留め）を示します。図のように要所に三角形を作ることによって構造を強化します（三角形を大きくとると効果的です）。補強工を入れる場合は、必ず基礎のある柱にします。

両サイドの方杖（側柱 - 梁）が、農作業や内張りの障害になるような場合には、普段は方杖を側柱に沿わせておき、必要な時に取付けることも可能です。

◆台風や大雪直前の作業は大変危険ですので、充分余裕をもって行ってください。

## Point !



### ハウスの雪対策

ハウスの屋根勾配が充分でないと、雪が滑落しにくくなり、屋根の強度が弱い箇所がたわみ、そこに雪が溜まって倒壊します。勾配（20度以上）をとり、さらに局所的な「たわみ」ができないよう、垂木や横垂木（棧）の間隔を空けすぎないことが大切です。

